

安東由喜雄 著

書 評

臨床遺伝学のすすめ—映画にみる遺伝子、遺伝性疾患

雨宮 浩(国立循環器病センター研究所名誉所員, 国立小児病院小児医療研究センター名誉センター長)

今までにない, ついつい引き込まれて読んでしまう医学書である。専門医が読んでよし素人が読んでよしの書である。専門的な情報を楽しくインプットしてくれる。

ところで国境を越えた人畜共通感染症の話題が絶えない。このところだけでも狂牛病, 新型肺炎, 鶏インフルエンザと続き, あわれなことに世界中で無数の家畜が処分された。それにしてもわれわれが日常目にしている食肉やペットが, そのほとんどが輸入に頼っていたとは知らなかった。世の中から牛丼が消えうせるとか, どこぞの国では流行の情報を役所が握りつぶしたとか騒いでいるが, グローバル化した現代の防疫がいかに難しく影響の大きいものかわかる。素人の私にも, 正確でリアルタイムの情報が防疫にとっていかに大事か理解できる。

私ごとで恐縮だが, 臓器移植という先端医療に携わってきた。臓器移植は臓器提供者という患者ではない第三者を巻き込むという特殊性がある。臓器提供が生前なのか死後なのかにかかわらず, 第三者を巻き込んで行う医療に意味があるのかどうか, 死後提供というときには死とはなんぞやとか, 個人の意思と家族の意思の軽重とか, 日本人の歴史的民族的背景にまで立ち入った社会的議論が必要であった。このためには臓器移植とは何か, われわれは死をどのように捉えているのか, 社会に対して説明する必要に迫られた。日本で初めてとはいわないが, 実地に情報伝達の必要性和, それ以上に難しさを体験した医師の一人となった。最近ではマスコミでの医学報道も増え, 昔とは随分と違ってきた。

それでも折につけ医療情報が少ないといわれる。高度先端医療が叫ばれ, その安全の裏づけにヒト組織での実験が必要だといわれても, なぜ必要かという情報がほとんどないのはどういうことなのか。これでは市民として理解したくてもできないし, 協力もできない。さらには人の組織を切り取ってまでも名誉を追いかけるのかという不信感へと変わってしまうといわれたことさえあった。そこで最近では, 医師だけでなく患者団体, 一般市民が参加した研究

会が誕生し, どうすれば医療情報を素人集団に理解してもらえるのか, 市民側の要望と医療側の希望を出し合うようになった。

本書著者の安東由喜雄氏に初めてお会いしたのは, そのような会合の一つであった。氏は医師としてまた医学者として, 専門のアミロイドーシスの診療と研究について1時間余語られた。それは科学的専門性を超越した人間に対する愛情の爆発であった。満場の聴衆は, 医療者も患者も市民も, たとえ専門的な内容を完全に理解しなかったとしても, 診療あるいは医学研究というものが, このような崇高ともいえる情熱によって推進されることを知り, 感激するとともに医療と医学研究に対する信頼をこの上なく高めたのである。まさに私もその一人であった。

今回の著作は, 映画と医学の見事な融合である。さすがに神経内科専門だけあって, なにを見ても, 映画を見ている最中も, 銀幕の事件と病気を結びつけてしまう。法律家にいわせれば映画を診療の判例にしようということだろうか。西部劇好きであった学生時代を思い出しても, 氏の映画好きは素人の域を出ている。おかげで医学と映画学(?)の2つの専門性が, とっつきにくい神経内科の講義を読みやすいお話にしてくれている。

情報はいくら提供しても相手にインプットされなければ意味がない。情報を脳にインプットする第一段階は読みきることであろう。この本を医学書と紹介したが, 通常医学書は読みにくい。ところがとにかくこの本は読まされてしまう。だから医学書というより異学書というべきか。二つの異なった分野の融合した書物であり, それゆえに読んで楽しく, 従来の医学書にはない異なったセンスの書物なのだから。

とにかく氏は読者を楽しませながら情報提供者としての責任を完全に, しかもユニークに果たしている。

(四六判 226 頁 定価 1,890 円(本体 1,800 円+税 5%))
(2004 年 マネージドケア・ジャパン 刊)